

小西正捷先生のご逝去を悼む

近藤 英夫¹・上杉 彰紀²

Obituary for Prof. Dr. Masatoshi Konishi

Hideo KONDO¹・Akinori UESUGI²

立教大学名誉教授、小西正捷先生が、2020年9月28日、逝去されました（享年82歳）。先生のお生まれは、1938年12月16日、東京都。青山学院高等部から国際基督教大学に進学。卒業後、インド政府の国費留学生としてカルカッタ大学に留学（写真1）。1960年代の多くの時間を南アジア各国で過ごされています。

帰国後は、東京大学大学院に進まれました。大学院を終え、法政大学や中央大学などで講師を務められた後、立教大学文学部に迎えられ、長く教育、研究に尽くされ、2003年に定年退職されました。退職後は、インドのシムラーにあるインド国立高等研究所（Indian Institute of Advanced Study, Simla）において紙漉の研究（*Hāth-Kāghaz: History of Handmade Paper in South Asia*, Indian Institute of Advanced Study/Aryan Books International, Simla/New Delhi, 2013）で学位を取得されています。

1960年代のアフガニスタン・パキスタン（京都大学隊調査隊）の調査に参加され、さらに1980年代半ば～90年代半ばのペルシア湾岸地域（立教大学調査隊）の調査を主宰するなど、南アジアとその周辺地域の各地でフィールド・ワークを実施されています。

こうした体験をもとに、先生はここ半世紀の間、考古学、文化人類学、歴史学と、人文科学のあらゆる分野で、南アジア研究を牽引し続けてこられました。

考古学の分野における小西先生のご功績ですが、インダス文明研究を推進したことが、第一にあげられます。さらに「インド考古研究会」を主宰し、多くの研究者を育てたことも、先生のご功績と考えます。

インダス文明の研究ですが、先生の初期の研究に、「インダス文明とアーリヤ世界の背景」（『岩波講座世界歴史』3、岩波書店、1970年）と、『インダス文明—インド文化の源流をなすもの—』（共著、日本放送出版協会、1980年）があります。ともに、インダス文明が、後のインド文化にいかに引き継がれていったか、重要な視点を提起しています。わが国のインダス文明研究のあり方を方向付けた論考であり、今日なお読み継がれている概説であります。

さらに先生は、1990年代に、ペルシア湾岸のバハレーン島で、前二千年紀初頭のインダス文明関連遺



写真1 インド留学中の小西正捷先生

跡、アイン・ウンム・エッスジュール（Ain Umm Es-Sujur）遺跡の調査を行っています。この調査は、アラビア海を介したインダス・メソポタミア両文明の交易・交流の解明を企図したものです。同遺跡の調査は、湾岸考古学の草分けであるG. ビビー氏（Bibby）の訪問を受けるなど、国際的にも注目された調査でありました（写真2）。

次に、小西先生とインド考古研究会（1966～）について述べたいと思います。

この研究会は、曾野寿彦、丸山次男、山崎利男、山崎元一、辛島昇各先生および小西先生により、1966年に創設された研究会です。主宰者は、小西先生でありました。

インド考古研究会は、開放的な研究会であり、南アジア研究を志す多くの人が活発な議論を交わす場でありました。そこでは、アラビア海からベンガル湾まで、ヒマラヤ山脈からスリランカまで、南アジアの多様な歴史と文化について語られました。そして議論の中心にはいつでも先生がおられました。

インド考古研究会では、先生の言葉に励まされ、何人もの研究者が育っていきました。私もその末席に座るものです。「肩の凝らない、自由な議論を」が、先生の言葉でした。真のアカデミズムが、そこにあったと考えます。

¹東海大学文学部 School of Letters, Tokai University²金沢大学国際文化資源学研究中心 Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University
西アジア考古学 第22号 2021年 165-166頁 ©日本西アジア考古学会

小西先生、長い間、導き下さって、本当にありがとうございました。謹んでご冥福をお祈りします。
(近藤英夫)

* * *

小西先生との出会いは、私がまだ学部2年生の時にインド考古研究会に参加した時のことです。はじめての研究会への参加ということで随分と緊張して、会場であった東京大学学士会館に向かいました。予定時刻よりも30分も早くに着いてしまったため、まだ会場にはどなたもいらっしゃっておらず、ますます不安にかられながら先生方が来られるのを待っていた記憶があります。発表されたのがどなたであったのか、また発表の題目が何であったかもはや失念してしまいましたが、小西先生のおだやかで学者然としたお姿だけはよく覚えています。その後、インド考古研究会に足繁く通うようになり、小西先生の南アジアに対する強い好奇心と深い愛情に支えられた研究姿勢に常々接してきました。

20代半ばをインドの大学で過ごされ、英語、ベンガル語、ウルドゥー語など、南アジアで用いられる言語に精通されるとともに、先史時代から現代、遺跡から伝統芸能、農村から都市にいたるまで、南アジア文化の多様な事柄に対する広範な関心と深い知識をもって研究を進められてきました。その成果は私たちの南アジア理解にとって大きな礎であることはいまでもありませんが、近く先生に接した私にとっては、

フィールドワークを中心とする研究分野に関わる上で、学問以前に、現地の人々といかに接し関係を築くか、現地の社会、文化にいかに接近して理解するか、その根底に現地の人々や文化に対する敬意、愛情、そして多面的、多角的な関心が不可欠であることを教えていただいたことが最も大きな財産であったと思っています。

私も10年以上の時間を南アジアで過ごし、考古学に限らずできるだけ広い関心から南アジアの人々、社会、文化とつきあい、自分なりの南アジア理解を培ってきました。慣れない土地で生活し、過酷な環境で研究活動を行うことは、外国をフィールドとする研究者にとって避けて通ることはできませんし、おそらくは小西先生も多々大変なご苦労をされたのではないかと思います。私も多分に漏れず、時に倒れそうになりながら調査・研究を行ってきました。思い返してもゾツとするようなこともありましたが、それでもどうにか続けていくことができたのは、学生の頃に小西先生から学んだ南アジアに対する研究姿勢に支えられてきたがゆえのことと、今更ながらに痛感しています。

小西先生とご一緒にインド、パキスタンに行く夢は叶いませんでしたが、先生が広い関心のもとで切り開いてこられた南アジア考古学の道程をたどりながら研究を進めていくことで、先生からいただいたご学恩にわずかでもお返しできればと思っています。

ご冥福をお祈りいたします。

(上杉彰紀)



写真2 バハレーン、アイン・ウンム・エッ＝スジュール遺跡にて G. ビビー教授と